

青年部 青林会 特別 栄林特

三月一三日、札幌市で開催された栄林会青年部の講演会で、特別講演「オーストリアの林業を視察して」が行われた。講師は、三井物産フォレスト㈱北海道事業部長の久保廣氏。久保氏は、昨年の一〇月六日から一四日までの日程で、オーストリア林業・林産物の視察(日本林業経営者協会が企画)に参加した状況を次のように報告した(要旨)。

オーストリア林業を視察して

上

久保廣氏

三井物産フォレスト
北海道事業部長



高性能機で伐採、トレーラーで集荷

オーストリアは、北海道とほぼ同じ面積で、うち森林面積は三九六万ha、森林率は四七%である。人工林率は五%。木材伐採量は日本より多く、年間一九〇〇万m³とかなりある。針葉樹林はトヒが五三%と多くを占め、広葉樹はブナ、カシなどで構成されている。

森林所有者は、二〇〇ha以下の小規模所有者が五七% (農業との兼業林家)、二〇〇ha以上所有の貴族・寺院などが三〇%、国有林が二三%で、合計一七万人の森林所有者がいる。林内路網はha当たり八七mで、日本のha一六mに比べかなり高い密度である。ちなみに、当社の林内路網は、北海道ではha三六

mとなっている。高性能林業機械で生産性を高めるためにも、今後はha

七〇mをめざしたい。視察の一日目は、湖畔に城を所有している貴族の所有林を訪れた。森林三〇〇ha、農地一五〇ha、ファミリア公園五〇haを所有し、年間約七〇〇

〇m³の木材を生産している。人工造林はほとんど行われていない。一〇〇年生のトヒ皆伐(ha三三〇m²)の収入は、m²当たり七〇〇〇円と説明を受けた。道端渡し素材価格は、A材がm³一万四〇〇〇円、B材が同九五二〇円、C材は同五四四〇円、皆伐の経費は、ハーベスタ・フォワーダ作業による道端までの搬出で、m³三〇六〇円となっている。

間伐現場の視察では、ロングリーチのハーベスタで、価格は工場管m²一万六〇〇円程度。土場の面積は二ha、製材ラインは三つあり、乾燥機は三二基で八〇〇m³の容量を持つ。集成材生産では、六m幅の連続プレス機があり、日本の中国木材伊万里工場と同等のもので、近く集成材の生産量を一〇万四〇〇〇m³から一二万m³へ拡大することだった。

製品の出荷先は、日本向けが四割、国内向けが二割、中東が二割など。工場内には、オーストリア国鉄から五〇〇mの専用引き込み線があり、このことから規模の大きさが伺える。(続く)



栄林会青年部 特別講演

三月一三日、栄林会青年部の講演会で、三井物産フォレスト(株)北海道事業部長の久保廣氏が「オーストリアの林業を視察して」と題して特別講演を行った。今回はその第二回目である。国際林業機械展など視察の状況を次のように報告した(要旨)。

三井物産フォレスト
北海道事業部長
久保廣氏



オーストリア林業を視察して

下

ウィーンの森で国際林業機械展

視察の二日目、三〇〇km移動してバイオマス発電所を視察した。ヨーロッパ最大のバイオマス発電所で、二〇〇六年八月に稼働した。地域の熱供給会社、ウィーン電力(株)、オーストリア国有林(株)が共同出資して作った。木材を燃料に、一万二〇〇〇世帯分の熱と四万八〇〇〇世帯の電力を供給している。

一日の木材チップ消費量は一八七五m³、年間燃料消費量は原木換算で二四万七〇〇〇m³にのぼる。集荷範囲は半径一〇〇km圏内で、チップの買入価格はm³二五五〇円、丸太に換算するとm³七六五〇円と予想される。

日本のバイオマス利用の取り組みと違い、剪定枝・端材的なものは採算が合わないため、集荷さ



ハーベスタとの複合機モービルタワーヤーダ

また、グラップルの役目も果たすハーベスタもあった。ヘッド部の送りローラとソー部分が大きく跳ね上がり、グラップル仕様になる。これは国産の機種も改良が必要な点であると感じた。

四年に一度ウィーンの森で開かれる国際林業機械展を視察した。計三日間の開催期間中に二万人が訪れる大規模な機械展で、四・九kmの林道に五二社が出展していた。視察した機械のうち、モービルタワーヤーダ(価格六〇〇万円)は、キャビン付きのアームクレーンに、ハーベスタが付いており、リモコン操作で材の荷外し・ワイヤ操作が一人である。

丸太の荷掛けに使う器具であるチョーカーも、リモコンで簡単に荷外しできるものが開発されている。四個セットで二二〇万円。ワイヤーを外す瞬間に起きる怪我や事故を防止できる。すぐにも導入してみたいが、日本では電波法に触れる恐れがあるようで、まだ模索中である。



このほか、最新のハーベスタやフォワーダが展示されていた。日本ではクローラタイプの建設機械がベスマシンになっているが、ヨーロッパでは農業との兼業のため、トラクタをベースにしているなどの違いがあった。

視察を終え、オーストリアの林業は、一〇〇年一六〇年を伐期とし、資源が豊富だった。こうした天然更新型の林地を見る限り、当社が手掛けようとしている天然林誘導が、将来こうなっているものだとつくづく感じた。

機械展については、機体が大きすぎることや高価格が気になったが、日本の林業機械への改良につながる可能性を信じて、いくつか挑戦を試みたいと思っている。(終)